

## [講演要旨] 『金木屋日記』に見る幕末の災害情報

弘前大学 白石 睦弥

### §1. はじめに

『金木屋日記』(弘前市立弘前図書館蔵八木橋文庫)は、酒造業を営む金木屋(屋号山一)又三郎敬之(武田正三郎)が、天保八年(1837)、賀田(よした・現弘前市賀田)へ転居してから文久二年(1862)に至る期間の日記である。

記述内容は日々の天候の詳細、日常生活、村人の動向、風聞など多岐にわたる。さらに、金木屋は弘前藩家老の大道寺家、藩医の手塚家・小山内家などとも交際があり、両浜(青森・鯉ヶ沢)の豪商らと姻戚関係を結んでいたため、伝達され同史料に記された情報は、領内外にわたる金木屋の広範なネットワークを示している。当時の知識人層の持つ知的好奇心の強さ、興味の方向性などについて知ることのできる好史料であり、幕末の地域を知る上での様々な情報の宝庫でもある。

なお、同史料はこれまでに、全体の抄録訳として斎藤昭一解説・編集『山一金木屋又三郎日記 抜粋編』(青研・1995年)が刊行されているほか、『新編弘前市史 資料編3(近世編2)』(弘前市・2000年)に嘉永六年(1853)分、『新編弘前市史 資料編 岩木地区』(弘前市・2010年)に安政元年(1854)分が翻刻抄録されている。しかし、内容が膨大であることなどから割愛部分も多く、概要は紹介されながらもテーマに沿った検討を加えられ、研究対象となることは、ほとんど無かったと言って良い。

本報告では、主に安政年間を中心として、同史料中における災害に関する記録と、瓦版を含む災害情報、同情報の伝達経路について検討する。

### §2. 領内の災害情報

領内の災害については、災害時の様子や被害・対応などについて、主に金木屋が直接見聞した情報を記している。

#### 2.1 硫黄山出火

岩木山の硫黄山出火は火山性の水蒸気爆発などによって露出した硫黄が延焼するというものであったが、実際的に城下町や在方の人々が居住している地域にほとんど影響は無い。それにもかかわらず弘前藩はこの出火に対応し、領民は動揺を見せながらもその消火に自主的に加わった。

#### 2.2 地震と「地震用心」の災害教訓

当該時期に津軽領において小規模な有感地震はいくつか散見されるものの、大規模な地震災害は発生していない。しかし、江戸地震の情報などを得た金

木屋では「地震用心のため」に雪下ろしをさせたり、商売柄火を多く使うとして地震の際の消火の用心をしたりするなど、領内で過去に発生した災害や、他地域での災害情報に基づいた防災意識の高さが窺える。

#### 2.3 火災・水害

地震と比較して頻発していた火災や水害は比較的に多くの記述が見られる。災害そのものの記述もさることながら、「いたこ」など民間信仰者の「口寄せ(お告げ)」や「夢見(夢占い)」などが災害情報として領内で流布することに注目したい。幕末の民衆心理を考える上で興味深い記述である。

### §3. 領外の災害情報

領外から伝達された災害情報は、主に2系統に分けられる。ひとつは商売関係のルートを通じて入手される情報、もうひとつは藩役人などからのリーク情報である。

#### 3.1 1854 安政東南海地震と 1855 安政江戸地震

両地震の被害や復興、災害情報などについては重厚な先行研究が存在する。そのため、ここでは北辺に住居する金木屋において、両地震はどのようにとらえたか明らかにする。

家老や諸役人とつきあいのあった金木屋は藩からのリーク情報として藩邸被害などの情報を詳細に記しており、また各方面から入手した情報の時系列も情報の伝達ルートなどを考える上で重要である。

#### 3.2 1854 嘉永京都大火・1855 安政江戸地震と瓦版

主に書写された瓦版は2種類である。ひとつは嘉永京都大火の1点で、これは得意先などの被害を知らせるのに便利と多くの瓦版に記されるように、被災地に近い場所から金木屋本家に伝達され、敬之は本家から借用して写している。もう1種は、安政二年(1855)日記の巻末に書き写された安政江戸地震の瓦版であり、朱色と薄墨で巧みに描かれた。



『金木屋日記』写真(弘前市立弘前図書館蔵八木橋文庫)